

現代のマナー指導

~ 教員養成における礼法指導を含めて ~

明石伸子

日本マナー・プロトコール協会理事・事務局長

1. はじめに

今、「マナー」という言葉を目や耳にしない日はないといってもよいだろう。電車に乗れば「車内マナーにご協力を!」とアナウンスが繰り返され、雑誌などでもマナー特集は大人気だ。私が所属する日本マナー・プロトコール協会にも、こうした関心の高さを示すように、以前に比べて問い合わせや、検定・セミナーの申し込みが増えている。

なぜ、今、"マナーブーム" なのだろうか…。この問いについて、日本人が抱く "マナー" の概念とともに、現代のマナー事情についての私見を述べたいと思う。

(1) マナーとは何か

大学や企業などで研修、指導に携わっていると、"マナー"というこの3文字の捉え方は、人によってかなり差があることを感じる。日本には「マナー」のほかに、「エチケット」や「礼儀」「作法」といった言葉もあるが、その差異についても正しく認識がされていないばかりか、最近はすべて「マナー」の一言で済まされているように思えてならない。

私はかねてから、物事の本質を見極めるためには、言葉の意味やその変遷をたどってみるのが良いと思っている。そこで、まず、これらの言葉の差異について紹介したいと思う。

「マナー」と「エチケット」、「礼儀」と「作法」の違い

本来、「マナー」と「エチケット」は違う意味をもっている。「マナー」の語源ははっきりしないが、英国の Manor(マナ=荘園)と関連が深いと言われている。イギリスにはかつて"マナハウス"と呼ばれる地域の集会所(コミュニティ)があり、それを建てたのはジェントルマン(gentleman)の語源となった地域の地主(Gentry)であった。人々が集うマナハウスで、ジェントルマンによって示された博愛精神や人との関わり方が手本とされたようだ。

一方、「エチケット」の語源は、ルイ 14世の頃、ベルサイユ宮殿の庭に立てられたトイレの場所を示す 注意書きだったという説や、宮廷内に入るときに渡された身分を示す札だったなどの説がある。いずれに しろ、それが宮廷内の作法をさすようになった。

アメリカで有名なマナー&エチケットの本に『Emily Post's Etiquette』があるが、そのなかで著者のポスト女史は、「マナー」と「エチケット」の違いをこのように述べている。「エチケットは他者への思いやりに基づく行動の規範であり、良いマナーとは、この規範に則って生活をしようという人々の温かい心や善意である」と。

日本語ではどうだろうか。辞書では「礼儀」は、相手に対して失礼にならない態度や振る舞いとあり、「作法」は生活の中で昔から決まっている"仕方"や"やり方""決まりごと"などと説明されている。

こうして見ると、「マナー」や「礼儀」は、相手に対して取るべき態度や配慮、社交上の心得であり、一方、「エ

チケット」や「作法」は、その"心"を相手に伝えるために知っておくべき知識やしきたり、あるいは心を伝えるための身体的な動作や振る舞いなどをさすと言えよう。

マナーの目的は、より良い人間関係を構築することにあるが、そのためには、善良な人としての"心のあり方"と、規範となる社会的な"知識や所作"などの修得といった両面が必要なのだ。しかし、「衣食足りて礼節を知る」ということわざがあるように、これらは自らの志だけで高められるものでもない。例えば、命に関わる状況のときに人のことを慮る余裕はないように、その人を取り巻く環境も大切な要素である。「マナー」や「礼儀」が、社会や人の"成熟度のバロメーター"であると言われるのは、こうした点からであろう。

武道の世界では「心」「技」「体」という言葉がよく使われる。これを「マナー」に照らし合わせてみると、ゆとりのある優しい「心」と、それを伝える「技(術)」、そしてその規範となる「知(識)」のバランスが取れていることが大切で、それらがバランスよく整っていることが、品性ある人、品格ある振る舞いと言われるのではないかと、考える。

(2) 現代のマナー事情

朝日新聞が、2008年2月から3月にかけて国内の3000人を対象にマナーについての調査を実施した結果、9割以上が昔に比べて「日本人の公共マナーは低下している」と感じていることが明らかになった。特に「満員電車でのマナー低下」を感じる人が多く、「バスや電車内における携帯電話での通話」「車内での飲食」「(同) 化粧」「路上喫煙」なども不快を感じる人が多かった。このほか、「ゴミを分別しない」ことへの不満も72%に上った。それに対して、「日本人はマナーをよく守る」という回答は30%を切る状況で、かつては「礼節の国」と言われた日本だが、大多数がマナーの低下を実感していることが明らかになっている。この原因は様々あろうが、私は以下のように考える。

「以心伝心」の言葉が表すように、これまでの日本は、大きく見れば単一民族で同質、同一価値であった。それゆえ、人との関係のなかで異端視されることを嫌う傾向が強かった。しかし近年、情報化、グローバル化などによって価値観やライフスタイルが急激に多様化し、これまでの常識では考えられなかった服装、考え方、振る舞いをする人が増えたことによって、「異質」であることを気にしない人が増えてきた。

本来、「マナー」の目的である"よりよい人間関係の構築"も"自らを品格ある人として認めてもらいたい"という願望も、その目的自体が価値を失えば、マナーが低下するのは当たり前だ。

しかし、マナーを意識しない人が増えれば増えるほど、一方ではこうした状況に危機感を持つ人も増え、マナーに無関心な層と、関心の高い層の二極化が進んでいるように思えてならない。それが、現代のマナー事情ではないだろうか。

2. 教育界のマナー指導の現状

かつてわが国は「礼節の国」と呼ばれていた。子供達は家庭で躾られ、 人間関係の中で"しきたり"は経験を通じて自然に身につくものであっ た。しかし時代が変わり、核家族化のなかでは、人への接し方やしきた りは誰も教えてくれない。マナーは意識的に学ばなくては身につかない ものになりつつある。

本来、大学や専門学校は、高い教養や専門性を身につけるための機関であったはずだが、現実には、それ以前のマナーを知らないことが問題





となっている。実際に、当協会では学校から要請を受けて、学内で「マナー・プロトコール検定」の集合 受験を実施したり、マナー講師を派遣している。さらに以下で、私が関わった具体的なマナー指導の取り 組みを紹介したい。

(1) 杉並師範館でのマナー講座

杉並師範館は、ユニークな行政政策で話題となっている杉並区の山田宏区長の発案で、発足した小学校の教員養成機関である。試験に合格した「塾生」は、1年間、土・日曜日に「師範館」に通い、社会人として必要な資質を高めるための指導を受ける。その、限られたカリキュラムの中に、3年前から「マナー」が取り入れられた。

講義時間は1時間半と短いが、塾生は非常に熱心で、改めてマナーを身につける大切さを実感してくれているようだ。講義の内容は、マナーとは生活習慣の一部でもある点を強調している。なぜなら、生徒が一日のうちに学校で過ごす時間の長さを考えると、教師のマナーは生徒のマナー意識を高める上では、非常に大きな影響を与えるからである。だからこそ、挨拶や言葉遣い、服装や身だしなみ、姿勢や態度など、教師としての日常の生活態度や振舞いが問われる。教師は生徒にとって、身近に接する"社会人の模範"にならなくてはならない。

(2) 全国学校長会家庭部会の取り組み

高校や中学でも、マナー教育の必要性が高まっている。生徒と教師、生徒同士の 人間関係など、しきたりや作法という側面に加えてコミュニケーション力という点 からもマナーを意識することは、大切なことである。

こうしたことから、全国学校長会の家庭部会では昭和33年に発行された「私たちのエチケット」という副教材の見直しを実施し、2009年4月から改訂版が発売された。



この取り組みは、家庭部会の教員の方々が一から教科書の内容を精査し、原稿を 作成するという大変な作業の上に完成した。この監修を引き受けた関係で、家庭部会が毎年開催している セミナーの中でもマナーについての話をした。その会に参加した幾つかの学校では、学校全体でマナーの 向上に取り組んでいて、それが差別化にもなっているようだ。よき家庭人をつくるための家庭科という学 科の中で、マナーが教えられることは大変、意義深いことだと思う。

(3) 大学の授業

私は現在、2つの大学で授業を担当しているが、そこで感じるのは冠婚葬祭や年中行事などの"しきたり"が伝承されていないことだ。一例を挙げると、和室が減ったことによって「床の間」を知らない学生がいる。バレンタインやハロウィンは盛り上がってもお彼岸やお盆、節句の行事を経験していない。お正月でも御節料理を食べない、箸の持ち方がおかしいなどなど、昔、"当たり前"に出来たことや知っていたことが、今では出来なかったり、知らないことも多い。また、知らないので自分の振る舞いに自信がもてない。そこで、より一層、しきたりを簡略化し、人との関わりを疎んじる傾向が強くなっている。

マナーは、その社会が長い年月をかけて構築してきた共通の価値や認識の上に成り立っているとすると、その社会の「文化」であるとも言える。しかし、家庭内、世代間、コミュニティなどの関係性が希薄になり、しきたりを含めた日本の伝統的な文化は風前の灯の状況と言ってよいのではないだろうか。

大人のマナー講座

それらが今後も受け継がれるためには、知識としてだけでも知っておくことは意義がある。知っていれば、日常の生活に取り入れて"やってみよう"と思えるからだ。このように、しきたりやマナーを知識として教えることは、後世に日本の生活文化を伝えるためにも必要なことであると考える。

3. マナー指導に必要な要素

次に、実際のマナーの指導について考えてみたい。



(1) マナーの知識

当然のことであるが、マナーに関する知識の学習は不可欠である。ご承知のようにマナーはマニュアルでは対応しきれない。その状況や、相手にあった過不足のない振る舞いが大切である。いわゆる「TPO」だ。そのためにはマニュアル的な理解では不十分であることは承知の上で、それでも判断の基準として基本的な知識を知ることは大変意義がある。

そこで、当協会では、マナーやプロトコールの通信教育である「マナー・プロトコール検定合格講座」の開発や、『「さすが!といわせる」大人のマナー講座』)(PHP研究所)を発行している。これは、「マナー・プロトコール検定」を在宅で学習・受験できたり、検定受験対策のテキストにもなっている。マナーの歴史や言葉の解釈などにも触れることで、マナーの本質や原理・原則を理解してもらえるように工夫し、社会人として知っていて欲しい知識を一通り網羅している。

しかし、マナーは、知識だけでは身につかない。人への接し方に関しては実践が必要だからだ。人としての振る舞いの原点は以下のような点ではないだろうか。

- ① 目の前にいる相手を大切にする
- ② 相手にとって、どのようにすることが最善かを考える
- ③ 自分ができる最善を考える

この基準に則って考え、さらにその振る舞いや知識の背景になっている点を少しで

も理解させることも大切であると思っている。例えば、「お辞儀」は、急所である頭頂部を相手に差し出すことによって、相手への服従を示す行為である。この動作の由来を知れば、お辞儀は目下や地位の低い者から目上や地位の高い方に対してする行為であることが分かる。それに対して、同じ挨拶であっても外国人がする「握手」は手の中に武器をもっていないことを示す行為であり、友好の心を示すものである。したがって目上や地位の高い方が、目下や地位の低い者に対して手を差し出したときに、初めて手を握りかえすことができるのだ。「挨拶をする」という行為の本質は同じでも、お辞儀と握手のルールの違いは、こうした背景が理解できれば分かりやすい。

(2) マナーの指導方法

マナーは「心」「技術」「知識」の習得が必要だ。知識は書籍を通じて得ることができるが、「心」と「技」 は机上の学習では身につかない。

武道や茶道などでは、繰り返し稽古をすることを通じて心身の修養を行うように、礼法もまた繰り返しの訓練が大切だ。体育会系の学生は礼儀正しいと思われることが多いが、キビキビした態度は相手に対する敬意を感じさせる。このように、体の"キレ"や"メリハリ"は、相手への礼儀を表すためには重要な要素だ。たとえ心の中で相手を尊重していたとしても、ダラダラした態度ではその心は伝わらない。こう



した体の動かし方を含めた、姿勢、歩き方、座り方、態度などはある程度の反復訓練なくして、美しく整えることはできない。 また、「相手の立場に立つ」ということはどのように学べば良いのだろうか。自己中心的な視点から、「客観的な視点」に気づかせるにはどうすれば良いのだろうか。こうした課題は、講師が説明してもあまり効果はない。したがって私は、グループディスカッションを取り入れている。同世代の自分以外の人がどのように考え、どのような経験をしたか、人の意見を聞くことが視野を広げるためには有効だからである。また、ワークショップやロールプレイングなどで擬似体験することによって、新たな気づきにつながることも多い。

このように、マナーの指導は、ルールや知識の説明・解説に加え、所作の訓練、そしてグループディスカッションやワークショップなどによる気づき等、複合的な内容を組み合わせることが必要であると思う。

(3) 指導者の資質

現代では、教師と生徒はフレンドリーな関係が良しとされている。生徒と教師の会話はいわゆる「タメロ」であったり、教師から指名されても返事をしなかったり、廊下ですれ違っても会釈もしない。もちろん、生徒指導の中で双方の信頼関係は大切であるが、誤解を恐れずに言うならば、フレンドリーであることが生徒の将来に繋がるかと言えば、答えは「NO」であろう。教師に厳しくて怖いイメージを求めるものではないが、マナーの指導をする場合には、どうしても上下関係を意識した立場の違いを明確にすることが必要で、大切なのは、それを表す言葉遣いや振る舞いである。教師は、その点を意識して生徒との間に程よい距離感を保つことが求められるのではないだろうか。

社会に出れば、否応なしに上下関係が生じる。そのためには、教育の中でも、それに対応できるだけの 言動を指導することが、何より大切なことであると思う。教育現場の中で、年長者や立場が上である教師 に対する「礼儀」を日常生活の中で実践させることこそ、最も有効なマナー教育であろう。

4. おわりに

マナーは、日常のなかで実践されてこそ、初めて身につくものだ。また、人は一人では生きてはいけないからこそ、より良い人間関係が自分の人生をより豊かにする、ということに気づかなくてはいけない。したがってマナーを学ぶことの意義は、人生や人間の本質がどのようなものであるかについて学ぶことに他ならないのだ。

「人に喜ばれることをする」「人が嫌がることはしない」といった当たり前の行為の積み重ねこそマナーの本質であるが、今、それがわかっていても出来ない、あるいは、その判別がつかない人がいる。人に喜ばれることをすることによって"自分の心が豊かになる"ということを実感し、人から嫌がられることが"自分の人生を虚しくする"ということに気づいて欲しい。そして、勇気をもって人との関わり方を見直し、それを実践して欲しい。私の好きな言葉を最後にご紹介する。

「意識が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変われば人生が変わる」。これこそ、マナーを学ぶことの意義を伝えていると思う。

以上

